

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 86 号

2013年9月



駱駝山古典ルート・コメツガ林の美滝と夏の山岳植物観察会 本多 房子

7月7日（月）駱駝山の観察会が行われました。

興味を持ち、ホームページを開いてみると、駱駝山は吾妻山の一切経山の東方に位置し、以前は登山コースとして歩かれていましたが、現在は訪れる登山者はほとんどいないとのことでした。今年になって山岳会の人達が整備をし、以前のように登山できるようになりました。

つばくろ谷登山口からの出発です。少し歩くとシラタマノキ、ミヤマホツツジ、ウラジロヨウラク、ハナヒリノキ、ウロコミズゴケなどの花々や苔が観察できました。

今回の一番の主演となったのがオオバツツジです。葉は大きく花は筒状釣鐘形で美しい白い花でした。まさに「まぼろしの花」。吾妻山系ではここでしか咲かない花だそうです。佐藤代表や観察会の皆さんも写真を撮りながら花に見入り、大感激の様子でした。

ブナ林を経て賽の河原に到着です。マルバシモツケ、クロヅル、メイゲツソウが咲き、遠くには大根森が見えました。

賽の河原から不動沢まで歩いて行くと、ハクサンシャクナゲが華やかに群生しています。目を凝らすとチャイロヒメハナカミキリが甘い香りに誘われ止まっている姿が見えました。

目立たないところにひっそりと咲いていたのがイソツツジ。白



駱駝山遠景



イソツツジ

く可憐な姿が印象的な花です。更に不動沢を渡り、滑滝を登っていくと、樹林帯の中に鬱蒼とコメツガが生息しています。

視界が広がり、いよいよ目的地 1523m に到着。目の前には駱駝山そして吾妻山の絶景が私たちを迎えてくれました。この地帯は、火山碎屑物帯でキタゴヨウを中心とする小さな木々が島状に散らばり、これが森の原点であるとの説明を受け感動いたしました。

今まで体験したことのない自然の雄大さに触れ、めずらしい植物に出会い、大変充実した観察会となりました。

皆さんありがとうございました。



ハクサンシャクナゲ



不動沢右岸のコメツガ林



亜高山針葉樹林の始まり



ルリシジミ



チャイロヒメハナカミキリ & ト
ウホクヒメハナカミキリ



フタコブルリハナカミキリ

ウスバシロチョウ

鎌田和子

写真①は、昨年(2019年)の6月6日、米沢市を流れる最上川の河原で見たウスバシロチョウです。Aさんが、その一週間前に、偶然そこでウスバシロチョウを見たからと、私を案内してくれたのです。

ウスバシロチョウの食草がムラサキケマンということを知っているくらいで、ウスバシロチョウを見るのは初めてでした。案内されたところは、河川敷の公園から上流へさかのぼり、草が背丈ほどに伸び、釣り人だけが通るような狭い道を進んで行った先でした。その辺りには河川林があり、ヒンヤリしていました。そこに何頭もの白い蝶がふわふわ飛んでいました。これを『蝶の群舞』というのでしょうか。よく見ると、翅を小刻みに震わしています。けれど全体としてはふんわり飛んでいるように見えるのが不思議。もっと先の河川敷にもウスバシロチョウが飛んでいるかと歩を進めましたが、そこから先には一頭もいませんでした。きっとウスバシロチョウにはウスバシロチョウのお気に入りの環境があるのでしょうか。それにしても、ウスバシロチョウはどこに産卵するのでしょうか？大抵の蝶は食草の葉裏や根元に産卵するもので

すが、辺りにウスバシロチョウの食草のムラサキケマンは見当たりません。たとえあったとしても、今の時期は草むらの中で、消えてしまっているはず。「ウスバシロチョウは、いったいどこに産卵するの？これから孵化する幼虫は何を食べて育つの？」と気になりましたが、初めて見るウスバシロチョウや、トラフシジミを写真におさめることができたことに満足し、疑問解決にさほど執着しませんでした。

そして、今年のことです。半田山にヒメギフチョウがいるという話など、聞いたこともないのに、ウスバサイシンが半田山にたくさんあるから、ひょっとしたらヒメギフチョウがいるかもしれないと、単なる思いつきで、5月末にAさんと確かめに出かけました。ヒメギフチョウの卵は見つかりませんでしたが、代わりにウスバシロチョウに出会う幸運に恵まれました。半田山に向かう道々、「ウスバシロチョウを見に、そろそろ米沢に行かないとね。」などと、話しているその目の前に、ふわふわとウスバシロチョウが現れたのです！ビックリやら嬉しいやら。羽化してまもないようなウスバシロチョウが、道の両側に群れ飛んでいました。半田山にウスバシロチョウが生息していたなんて！Aさんと私にとっては、大発見・大歓喜でした。さらに、そのあと驚きの観察へと発展したのです。ウスバシロチョウを写真におさめたくて、二人とも、これぞと思うチョウを目で追い、静止するのを待って躍起になっていたとき、Aさんから、「ウスバシロチョウ、捕まえちゃった〜！」と声が上がりました。驚いて振り向くと、Aさんの指にはウスバシロチョウが挟まれてました。そして、「ウスバシロチョウのメスには〇〇がついているっていうけど、これかなあ？」と、私には何のことかサッパリ分からないことを言ってます。見ると、捕まえた蝶の胴体には確かに変なものが付いていました(写真②)。「ナニコレ？」思わず、その変な物体を剥がそうと引っ張りましたが、固くくっついていて剥がれません。寄生虫がついたものではなさそうです。「こんなの初めて見るよ〜。中は空洞みたいだね〜。」と、ためつつがめつ眺め、写真に撮り、大興奮の末にそのチョウを放しました。



① ウスバシロチョウ



② ウスバシロチョウ雌の交尾嚢

その変な物体は「交尾嚢」というもので、交尾を終えた♀チョウの腹部に付いているものだそうです。交尾嚢を付けたウスバシロチョウを実際に見たばかりなので、図鑑の解説がよく理解できました。半田山で♀のウスバシロチョウを捕まえたAさんに感謝です。

交尾嚢を調べた勢いで図鑑を繰っていくと、ウスバシロチョウの発生は年一回、越冬態は卵だと分かりました。だから、ウスバシロチョウが羽化する頃にムラサキケマンが消えていてもおかしくない。ムラサキケマンは春に卵から孵った幼虫が食べたのだから。それにしても、成虫はどこに産卵するの？それと、夏に産まれた卵が、次の年の春まで卵のまま過ごすなんて、私には想像もできません。昨年、米沢で感じた疑問が首をもたげてきました。この疑問を解決するのはかなり難しいことに思えました。ところが、願えば叶うの言葉どおり、あっけなく疑問は解決してしまいました。すでに半世紀も前に、ウスバシロチョウの生活史に興味・関心をもった先達が、「太陽の子ウスバシロチョウの生活」という観察記録文を発表していたのです。雨の日、Aさんと訪れた県立図書館で、昭和34年に出版された「日本昆虫記Ⅱ」に載っているのを見つけました。平易な表現で、私の疑問をすっかり解き明かしてくれました。来春、ムラサキケマンが咲く頃に、ウスバシロチョウの黒い幼虫を見に出かけてみようと思ったのです。(2013.6.24)

毎年7月20日頃になると鹿狼山にはヤマユリが咲く。ヤマユリは美しい花だ。花卉の先端がひらひらと反り返り、白く大柄で、女王のように誇らしげに咲いている。鹿狼山には10個くらいの花を付ける立派な株が鳥居の近くや頂上にあり、また、登山道沿いにも沢山のヤマユリが咲いていた。しかし、今夏7月21日に行ってみたが、鳥居の近くにあったはずの大株が無くなっていて、登山道を歩いてみてもヤマユリは激減しているようだった。頂上に何人かの人がいたので「ヤマユリが大部減りましたね。どうしたんでしょう？」と聞くと「イノシシが掘って百合根を食べたんだよ。人が食べて美味しいものはイノシシだって食べたいんだろうね」ということだった。そういえば、去年も、鹿狼山にはイノシシが地面を掘った跡がずいぶんあったから、私はミミズを掘って食べているものと思ったが、ヤマユリの球根まで食べていたのだ。



鹿狼山ではヤマユリの大株が消えた

阿武隈の山々にイノシシが増えたのは、福島第一原発の爆発により、土が放射能で汚染され、その土を食べるミミズが汚染され、ミミズを好んで食べるイノシシの肉が高濃度に汚染されて誰もイノシシを獲らなくなったからである。あれから国道115号線を走っているとイノシシの姿を見るようになったし、車とイノシシが衝突して車がベコッとへこんだとかの話も聞くようになった。テレビや新聞などでも、時折、原発関連の話題として取り上げられたりしている。新地町でも以前から鹿狼山の麓の杉目地区ではイノシシに畑を荒らされたという話を聞いたことがあったが、頭数が増えて、今はずっと下の地区まで降りてきているらしい。ジャガイモなども大部やられて、もう作らないという人も出ているそうである。また、相馬市の磯部地区などの海岸部でもイノシシの姿が見られるというから、交通量の多い6号国道をどう渡って行ったのだろうか。いずれにしても、イノシシは山にある食べ物だけでは足りないから里に降りてきているのだろう。2週間に一度、食品の放射性物質の測定結果が回覧板で回って来るが、イノシシの肉は680Bq/kgの時があった。もちろん、出荷及び摂取を控えるように国からの指示があるのだから、誰も食べないだろう。イノシシは増えるばかりなのだろうか。

知人に鹿狼山のヤマユリの話をした。知人はこのように言っていた。イノシシの被害がひどいから、イノシシ駆除に300万円ほどの予算が出たそうである。ところがイノシシを土に埋める訳にはいけないので、ペット火葬場に運んで焼却処分をすると5万円かかり、捕獲してくれた人に1万円払うと、1頭あたり6万円ほどかかるそうで、とりあえず50頭分の予算はあるが、それで何とかなるものかどうかは分からないらしいと。汚染されたイノシシを焼却したら、それなりの放射能は撒かれてしまうわけで、それはどうなのか。でも、あのように大型の動物を土に埋めたとすると、衛生上の問題や土壌汚染の問題にもなるのだろうし、本当にどうにもならない困ったことだねと私達は話したのだった。また、折も折、今度は福島第一原発汚染水タンクから300tもの高濃度汚染水が海に流れ出たというニュースが聞こえてきた。これだって、海の底にいる小さな生き物が汚染され、それを大きな魚が食べ、またそれをもっと大きい魚が食べるという構造だから、もう魚は危険で食べられないということになるだろう。

鹿狼山にヤマユリが無くなり、私のささやかな季節の楽しみがなくなったのは、元はといえば原発事故によるものだ。まあ、私は趣味の範囲だから我慢しようが、やはり鹿狼山の7月に大輪のヤマユリが無いのは寂しい話である。しかし、私達はこんなことでは次世代の子ども達に、安心で安全な食べ物を残してやることも、美しい自然を残してやることもできないのだとしみじみ思う。放射能汚染により生態系のバランスが崩れてしまった阿武隈の山々が元に戻る日はあるのだろうか。一度崩れたものを元に戻すことは難しいと思うが・・・。

(2013/09/06 記)

西吾妻山域登山道保全に関する環境省裏磐梯自然保護官事務所への申し入れ

高山の原生林を守る会では2000年以来、西大巓からの西吾妻山域の登山道誘導ロープ設置ボランティアを行ってきました。2009年からはNF米沢との連携により、より充実した体制で作業が進められています。しかし、林野庁の事業のもとに植生回復事業が進められている弥兵衛平湿原周辺とは対照的に、この地域は行政機関の関与は全くなく、行政施策の空白地帯となったままです。当会では2010年度に福島県、会津森林管理署および裏磐梯自然保護官事務所へ登山道保全対策に関する申し入れを行っていましたが、この度、再度、申し入れを行いました。その概要は以下の通りです。

日時 2013年7月24日10時～12時

場所 裏磐梯自然保護官事務所

出席者

環境省東北地方環境事務所裏磐梯自然保護官事務所

首席自然保護官 二神紀彦

自然保護官補佐 渡部のり子

高山の原生林を守る会

代表 佐藤 守、事務局長 奥田 博



1. 経緯説明(佐藤守)

- ・2010年6月に裏磐梯自然保護官事務所、会津森林管理署、高山の原生林を守る会で協議
- ・2011年2月に裏磐梯自然保護官事務所、NF米沢、高山の原生林を守る会で協議(議事録と資料提出)

2. 早急に行政的対応が必要と判断される箇所

- ◆ 西大巓周辺(Aブロック):山頂直下の斜面崩壊
- ◆ 若女平入口(Dブロック):湿原植生崩壊
- ◆ 梵天岩付近(Eブロック):池塘崩壊

3. 質疑応答

- ◆ 西吾妻周辺で活動している団体は?→高山の原生林を守る会、米沢 NF、(福島県自然保護協会)
- ◆ 森林管理署の考え→登山道は環境省、周辺の森保全は森林管理署
- ◆ 東北森林管理局所轄の置賜森林管理署の動きはいいが、関東森林管理局所轄の会津森林管理署の動きは?→管理局間で対応に温度差がある。
- ◆ 福島県自然保護課は何も動かない。→尾瀬の自然保護対応が免罪符になっているのではないかな。

4. 今後の進め方

- ◆ 環境省が中心となって、行政間の調整の場を設定してゆくことはやぶさかではない。
- ◆ 例えば「西大巓登山道崩壊」に絞って、環境省が中心となり、会津森林管理署、福島県自然保護課、自然保護団体の協議会を立ち上げるための課題を探る。

2011年2月の要望事項

高山の原生林を守る会からは、以下の2点について要望した

1. 行政的に管理責任者が明確にされても、実態として機能しなければ植生崩壊は進行してしまう。民間の自然保護団体などが参加した協議会を設置することで、行政的対応の遅れが明確になるし、行政同士の連携も可能となる。山岳の自然保護や登山道保全に関する大学の研究や環境省の取り組みでもこのような協議会方式が最も効果的であることが認識されつつあることを説明し、協議会立ち上げについても検討されたい。なお、山形県の対応次第ではNF米沢とともに要望書を提出することも検討したいので適宜、情報提供していただきたい。
2. 水場から西大巓の区間は、地形的な問題も植生崩壊に関係している可能性もあるので、木道の設置など物理的対応だけでは崩壊防止は困難ではないかと危惧している。専門家による現地調査も検討されたい。

東北ブナ紀行 (51)

奥田 博

秋田のあまり知られていない東光山と男鹿三山の真山・本山・毛無山縦走。美しいブナに出合えて満足。まだまだ東北のブナの山は尽きない。

8 3) 東光山 595m

信仰の山として栄えた東光山。登山道の途中には、崩れた石仏や祠、立派なお堂などが残されており、信仰の深さがうかがえる。大きな農家の隣に木造りの倉庫を見て、車道を離れて田んぼに囲まれた道をたどる。その先に登山口が現れる。次第に森の中をたどるが、杉の植林か雑木林でブナは現れない。建物の残る毘沙門堂を過ぎると、岩崩地帯に風穴が現れて涼しい。やがて山頂へむかう尾根に出ると、立派なブナに囲まれた登山道となる。ミズナラの立派な大木も混じっているが、総じてブナが見事だ。山頂には立派な神社が祀られている。昔の信者は、きっと大きなブナにも霊を感じていたかも知れないが、ブナがご神体になった話しは、あまり聞いたことがない。山頂からの鳥海山が見事だった。

コースタイム：登山口（40分）毘沙門堂（20分）ブナの尾根（30分）山頂



登山道の両側にミズナラと競うようにブナ



8 4) 男鹿三山

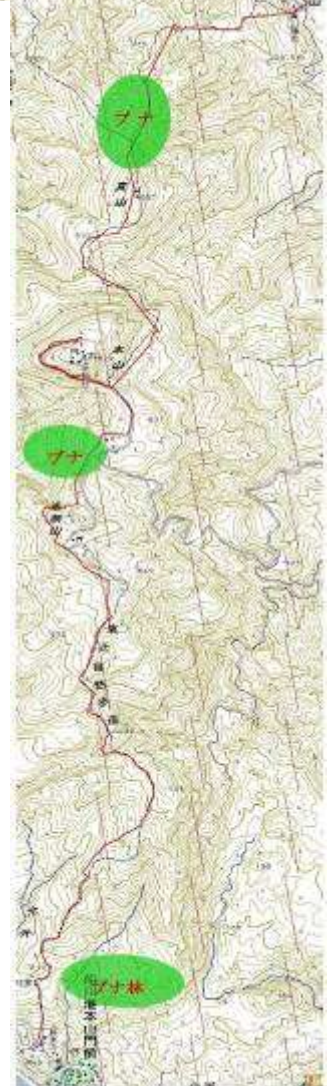
男鹿三山の縦走路を歩くことは交通の便が悪くてなかなか困難だ。神社あり、自衛隊の基地があったりと賑やかであるが、海の近い場所にブナの森が広がっており、身近なブナである。登山口の真山神社に立ち寄ってから歩き出すが、神社の方に「お気を付けて」といわれて出発。男鹿三山縦走は、標高は700m前後だが、距離は8kmと比較的長い。標高が低い分、人の手が入っており、自然度が高いとはいえない。真山への登りでは、霧雨が漂って、ブナ林が現れると幻想的な風景に変わる。

真山山頂を過ぎると、人の気配も少なくなり、ますます幻想的で暗い森歩きとなる。熊防止の鈴や笛や手拍子など賑やかに越える。本山への道は自衛隊道路が入っており、興奮め。山頂神社を諦めて、先を急ぐ。毛無山にも車道が走っているが、それを避けるように歩道が付けられている。見事なブナが点在している。ここより下りに差し掛かるが、下山口に近いところに五社堂と呼ばれる場所では、五つの社が連なるように建っており、これには驚かされる。ここから下山口まではいわば参道で両脇には標高50mほどに立派に育つブナだった。

コースタイム：真山神社登山口（1時間20分）真山（50分）本山（30分）毛無山下部（1時間10分）五社堂（10分）長楽寺登山口



霧雨に濡れるブナ



オオバツツジ (*Rhododendron nipponicum* ツツジ科ツツジ属)

多雪地帯のブナ林上部からコメツガ林に植生する落葉低木。日本固有種。日本海型分布の代表種とされ、県内では尾瀬や三国山周辺で植生が確認されているが、吾妻連峰では西吾妻山域ではなく東吾妻山域に隔離分布している。レンゲツツジ、ムラサキヤシオの仲間で、垂直分布としては両種の間際の標高に当たる山域である。

葉は互生で葉芽は枝先の花芽の直下にまとまって着生する。葉形は長楕円形で先端は尖らない。葉の周縁は全縁。葉および葉柄には柔らかい開出毛が散生する。ハクサンシャクナゲに匹敵する大型の葉が名の由来。

花は頂性で葉が展葉してから開花する。展葉後に開花するツツジは本種とバイカツツジ(*Rhododendron semibarbatum*)のみである。花序は散房状で5~10花の筒状のベルフラワーを咲かせる。花色はやや黄ばんだ白で、先端は5裂する。花の内側に散らばる淡緑色の斑点が外側まで透ける。雄しべは10本でムラサキヤシオと同じ。なお、レンゲツツジは5本である。花柄は腺毛が密生し粘る。

手元の資料や聞き取りによりオオバツツジの自生地での開花期は6月下旬と記憶していた。2010年7月25日の観察会で、山鳥山からのコメツガ林でオオバツツジらしい果実を見つけた。長年の山仲間のOさんと、翌年は花の時期に再訪しようと話していたのだが、翌年の大震災によりそれどころでなくなってしまった。この夏の観察会は薬師森を予定していたが、登山口のある滑川温泉までの道路の復旧が間に合わず不通のまま、担当のKさんの機転で急遽、駱駝山に変更しての実施となった。予定していた観察コースの路程が長いことから、私は、復興された古典ルートまではと先を急いでいた。見たことのない花が咲いているとの参加者の声に、戻ってみるとなんとオオバツツジの花であった。私は、開花期はすでに過ぎたと思い込んでいたために、下見の時も見逃していたのだ。積み重ねた観察会で育んだ仲間達の多くの眼によってかなえられた貴重種の大発見であった。



オオバミゾホオズキ (*Mimulus sessilifolius* ハエドクソウ科ミゾホオズキ属)

多雪地帯のブナ林を流れる沢沿いや高層湿原などの多湿地に群生する多年草。安達太良連峰では鬼面山、吾妻連峰では西吾妻山域に自生する。東吾妻山域では未確認である。属名は道化者を意味し、花冠の形を、歯をむき出して笑っているような道化師の姿に見立てたもの、種小名は柄の無い葉を意味する。DNA分析に基づくAPG分類体系では、ミゾホオズキ属はゴマノハグサ科からハエドクソウ科に変更された。

葉は十字対生で、葉柄は無い。葉形は長卵形で先端は尖る。葉縁には上向きの鋭い鋸歯がある。葉身には短毛が密生する。葉基部から走る平行脈が、規則的な草姿を強調する。茎は断面が四角形で分岐せず直立する。地下茎の発達がよく、大群落となる。

花は腋性で葉腋から長い花柄を伸ばし、ラッパに似た花筒と裂片から成る鮮黄色の合弁花をつける。花は1葉に1個着生するので花の付き方も対生状となる。花の形態は唇形花冠と呼ばれ、二唇性を示す。上唇は2裂。下唇は3裂する。下唇の内側には赤色の斑点がある。下唇真下の裂片は中央部が溝状に窪み、その両側の稜線部は赤斑点と棍棒状の腺毛が密生する。赤斑点と腺毛は両側の下唇裂片にも散生する。雄しべは4本あり、下の2本が長い。雌しべは1本で花柱先端は2つに分かれる。花の黄色い水辺の山岳植物には本種の外にキツリフネ、タマガワホトギスがあるが、いずれも赤い斑点を有している。ガク筒先端も5裂し、結実後、裂片先の枝と呼ばれる器官が伸長し、果実を包みホオズキの実のようになる。

1997年に初めてオオバミゾホオズキの花を見た。コケティッシュなキツリフネとは対照的に、花の姿は幾何学的な美しさが際立っていた。オオバミゾホオズキの自生地は限定的であり、裏磐梯でミゾホオズキとセットで確認して以来、長い間ご無沙汰していた。山岳植物の本格的な花の季節を迎える6月になると、どこを訪問すべきか悩まされるのだが、今年は無性にオオバミゾホオズキの花を見たくなり、6月早々に思い出の地を訪れた。16年前と同じ場所に、その群落は健在で、最初の一輪を観察することができた。その日は幸福な1日となった。



第 130 回自然観察会案内：高津森山・紅葉観察と芋煮会

日時：2013 年 9 月 29 日（日）8：00～15：00

集合場所 四季の里正面入り口・吾妻公園橋手前駐車場 集合時間 8:00 参加定員 20 名

内容 「廿一世紀の森」と呼ばれた高津森山(651m)の荒廃ぶりを観察します。観察会後は「長寿の泉」前で恒例の芋煮会です。午後は旧米沢街道周辺の史跡を見学します。

準備するもの 昼食、食器、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

* 装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用:保険代(300 円) 申し込み:9 月 28 日(土)まで

参加申込先:佐藤守(024-593-0188:午後 7 時～9 時)へ電話またはメールにてお願いします

第 131 回自然観察会案内：高松山・晩秋の里山観察会と総会

日時：2013 年 11 月 24 日（日）8：00～15：00

集合場所 小島の森第一駐車場 集合時間 8:00 参加定員 30 名(総会は定員なし)

内容:午前中は岡島地区・鹿島神社の裏山、高松山(別名蛾郎山)を散策します。午後はもちろ学習センターで総会です。

準備するもの:昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、手袋、帽子、着替、昼食、テルモスまたは水筒、嗜好品、食器、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳など(ルーペ・双眼鏡・各種図鑑)

* その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費:保険代(300 円) 申し込み:11 月 23 日(土)まで

参加申込先:佐藤守(024-593-0188:午後 7 時～9 時)へ電話またはメールにてお願いします

西吾妻登山道誘導ロープ取り下げ作業ボランティア(NF 米沢と共同:詳細は佐藤守まで)

1. 実施日:10 月 20 日(日)7時00分～17時30分(雨天時 10 月 26 日(土)に順延)
2. 定員 :5 名(山岳での行動において自己管理のできる方)
3. 内容 :人形石分岐から西大巓水場周辺までの誘導ロープの取り下げ作業を行います
4. 集合場所・時間:国道 13 号でん六跡駐車場 7時00分
5. 参加費 :1000 円(ゴンドラ・リフト代の 1 部を負担願います)
6. 申し込み:10 月 14 日(月)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします。

弥兵衛平湿原植生回復事業(主催:ネーチャーフロント米沢)第一回採種作業ボランティア参加報告 (佐藤 守)

8 月 18 日(日)に実施された弥兵衛平湿原植生回復事業の第一回採種作業に参加してきました。30 人を超える参加者があり、健脚班、標準班、ゆっくり班の 3 班に分かれての作業です。健脚班以外は、弥兵衛平湿原での採取作業ですが、健脚班は明月荘まで足を延ばしての採取作業で、さらに蕨(むしろ)の荷揚げも加わります。私は、健脚班の作業に参加しました。

採種対象種はミヤマヌノハナノヒゲ、ミカヅキグサ、ミヤマコウガイゼキショウ、ヌマガヤ、ミタケスゲですが、今年は開花が遅れたのか種子の充実が遅れ気味で、採種はミタケスゲとミカヅキグサが中心となりました。

蕨は発芽後の霜害防止のために使用されます。霜害により播種してもほとんどの芽生えが枯死していたのですが、蕨の被覆を実施してからは芽生えの生育が確保できるようになり、植生回復効果が向上しました。



蕨被覆後の植生回復状況

新年度の会費納入をお願いします:郵便振替 0 2 1 7 0 - 0 - 2 4 3 5 1 「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第 8 6 号 2 0 1 3 年 9 月 発行

編集・発行 : 高山の原生林を守る会 HP : <http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先 : 佐藤 守 Phone 0 2 4 - 5 9 3 - 0 1 8 8 (夜間 7 時～9 時)

郵便振替 : 0 2 1 7 0 - 0 - 2 4 3 5 1 「高山の原生林を守る会」

入会方法 : 年会費 (5 0 0 円) を添えて上記まで